介護の魅力と感動

第二章

岡山県老人福祉施設協議会　21 世紀委員会

（第４回　全国老施協　フォトコンテスト　入賞作品）

介護という仕事のすばらしさを、
多くの人達に知っていただきたい。
介護に対するマイナスイメージを払拭し、
介護の魅力を伝えたい。

私達　岡山県老人福祉施設協議会21世紀委員会がこのコンセプトを掲げ、2カ年が経過致しました。

残念ながら、介護に対するマイナスイメージの払拭が出来ているとは言えず、介護の仕事に対する評価も、必ずしも良いものばかりではありません。

また、介護は今、経験や勘ばかりに頼るのではなく、科学的エビデンス（証拠・根拠）に基づいたケアへと変わるべく変革の最中にあります。

しかしながら、『介護の仕事』は私達、現場の職員に数字やデータに裏付けする事などできない「魅力」や「感動」そして「奇跡」を与えてくれています。

そして、その介護の持つ「魅力」や「感動」が介護に携わる私達の原動力になっている事も紛れもない事実です。

そして、この想いを更に多くの方々へ知って頂きたいと思い、「介護の魅力と感動　第二章」を作成致しました。今回は介護職員からのメッセージの他に、『家族応募部門』や『ショート部門』など幅広く掲載しています。

この「介護の魅力と感動　第二章」をご覧頂き、介護に携わる職員の情熱や介護の持つ魅力・感動、そしてご家族の思いをお伝えできれば幸いです。

岡山県老人福祉施設協議会　21世紀委員会
委員長　池田英樹

ホームページアドレス　http://www.okayama-roushikyo.jp/

【職員部門】
『介護の魅力と感動』

【特別賞】

言葉に出来ない最高のありがとう

少しこわばったあなたの顔が、ぱっと華やかな笑顔に変わる瞬間（とき）がある。朝9時過ぎ毎日欠かさず面会に来るご主人に出会った一瞬の出来事だ。

会うとすぐに2人で荘内散歩。右足を引きずるようにして歩くあなたの手を引いて、サンルームから食堂を回って100mくらい運動をする。ソファーに座って腕や足をマッサージ。トントン叩かれると、ちょっと怒ったようにぶつぶつ独り言をつぶやくあなた。

あなたの髪が少し伸びると、散髪道具を一式持って来て洗面所の鏡の前で散髪。いつもすっきりしたショートカットの髪型で、他の方から〝おじいさん〟と間違えられた事もあったね。

家から持って来たジュースを、他の人に気付かれないようにこっそりとあなたに飲ませて帰って行くご主人「いいご主人ですね。毎日、来て下さって。」と言うと、決まってうなずき、あの華やかな笑顔で応えるあなた。それが私たち職員の日課のようになっていた。

ある日、ぷっつりとご主人の面会が途絶えてしまった。「あれ？今日、ご主人来られなかったねぇ。」「めずらしいねぇ。旅行かなぁ？」職員の誰もがそんな会話をする中、あなたは、いつもと何の変わりもなく坦々と過ごしていた。けれど、私たちがどんなに話しかけてもあの素敵な笑顔を見せる事はなかった。

しばらくして、ご主人が病気で入院していた事を知った。

数ヶ月が過ぎたある日の午後、突然面会に来たご主人。少し痩せて弱々しくなり、「今日の午後に退院して、家に帰る途中に寄りました。（笑）元気になりました。これ（あなた）をおいては、先に逝かれんから…。」と言いながら涙が頬をつたっていた。私も涙でご主人の顔がゆがんで見えた。

そして、久しぶりに尋ねて来たご主人に会えた時、あなたのあの華やかな笑顔が一瞬にして戻った。その素晴らしい大輪の笑顔は、ご主人に贈られた〝言葉にできない最高のありがとう〟だった。

けれども、再びご主人が面会に来る事はなかった。「これ（あなた）をおいては、先に逝かれんから…。」と言っていたのに…。

あれから4ヶ月、相変わらず坦々と過ごしているあなたに、もう一度『大輪の笑顔』をとりもどして欲しい。今度は私たちの力で…。

（第4回　全国老施協　介護作文コンテスト　入賞作品）

【最優秀賞】

感謝

「介護」という仕事を始めて16年・・・一度も離れることなく、この仕事を続けることが出来たのは何故だろう？と考えた時、これまでに経験した多くのエピソードが浮かびます。勤めてきた施設は幾つかありますが、その場その場で様々な出来事が日々起こり、都度笑ったり、泣いたり、喜んだり、悩み落ち込んだりと数え切れない程の思い出が蘇ります。そんな中でも、この仕事をしていて良かったと改めて感じた出来事が、ごく最近ありました。

看取りの時期にあった一人の入居者の方の最後の願いが叶った瞬間に立ち会うことが出来たのです。その方は食事を摂ることも出来ず、衰弱した状態にありながら、私の差し出したペンで私の掌に妹様の名前を書きました。私が「会いたい？」と聞くと、目に一杯の涙を浮かべて頷き、掌を合わせました。それを見た時、私は必ず会ってもらわなければという気持ちで一杯になり、妹様に何とか早く施設に来て頂けるよう連絡を取りました。

妹様にもさまざまな事情があり、直ぐに施設に足を運んで頂くことは難しいようでしたが、状況は理解して頂けたようでした。ご本人に残された時間が少ないことが分かっていた為、私達、施設の職員は焦り、何とか妹さんが到着されるまで、ご本人に頑張ってもらいたいと祈るばかりでした。

連絡を取った二日目の午後、妹様が面会にお見えになりました。その時にはご本人の状態は更に悪化しており、言葉を交わしたり、勿論筆談をすることも出来ませんでしたが、妹様が会いに来てくださっていることは、確かにご本人に伝わっていたと思います。妹様にもご本人の思いは十分に伝わっており、面会に立会った私に泣きながらお話され、最後に「ありがとうございました。」と声を掛けて頂きました。

翌日、その方はお亡くなりになりましたが、「妹に会いたい」という最期の願いを叶え、喜んで旅立たれたと、私は思っています。もしかすれば、私達、施設職員の自己満足なのかもしれませんが、妹様に掛けて頂いた「ありがとう」という言葉に、これからも出来る限り入居者の方の思いに寄り添える介護士でありたいという思いを強くしました。この出会いに感謝すると共に、この仕事を選んで本当に良かったと感じています。

【優秀賞】

気づかされたこと

私は、他人のイメージでこの仕事に就いたと思う。「あなたは優しそうだから、介護の仕事に就きそうだね。」と何人に言われたことか。周りの人達が私の将来を想像し、福祉関係の仕事を勧めてくれた。しかし、私自身は、特に福祉の仕事に魅力を感じていなかった。

その後、私は、周りのイメージを崩さぬまま、福祉系の大学を卒業し、特別養護老人ホームに介護職員として就職した。それからは、嵐のように月日が経ち、業務に追われ、日々の業務をこなすのがやっとであった。しかし、私に転機が訪れる。それは、私の担当利用者との別れであった。その利用者Aさんは、元気過ぎて目が離せないおばあちゃんでした。Aさんは、いつも介護職員日誌に登場し、内容を読む度に頭を抱えたのを覚えている。

そんな元気だったAさんも、内臓疾患が悪化し、嘔吐や血便が続き、食べることができなくなった。車椅子から落ちそうなほど動いていた足も動かなくなり、ついに静養室に移動し、施設で看取らせていただくことになった。看取りに入り2日目、Aさんは亡くなった。状態が悪化して亡くなるまでがあまりに早く、「もっと、何かできたかも知れない。」「もっと、してあげられることがあったのでは?」と、自分の力不足に悔し涙が流れた。最後のお別れをした後、泣いている私に上司がかけてくれた一言で、私は、初めて介護の魅力に気づかされた。

「介護の仕事は、病気を治したり、延命するのが仕事ではない。利用者が亡くなるまでにどれだけ笑顔になってもらい、幸せな気持ちになってもらうかが仕事。」

私は、この言葉を聞いて、今までの自分に恥ずかしさを感じると共に、「介護の仕事の魅力・感動はこれなんだ。」と気づかされた。

私はこれから、利用者の方々が笑顔でいられるように、又、幸せな気持ちになっていただけるように、この仕事を続けていきたいと思う。

【優秀賞】

ありがとう

Aさん。あなたは毎日私が仕事に来るのを楽しみに待っていてくれ、「来てくれたんか」と出迎えて下さいます。そんなあなたの笑顔が見たくて私は仕事に来ます。

私は、特別養護老人ホームで働く介護1年目の駆け出しの新入職員です。大学で福祉を専攻し、介護の世界に入りました。仕事に就く前は、介護の世界はあまり良いイメージでなく、正直不安が大きかったです。しかし、ある利用者さんとの出会いにより、不安が今では楽しみに変わりました。そんな私の介護に対するイメージを変えてくれたAさんとのお話を紹介します。

Aさんとの出会いは仕事を始めて2週間が経ったころでした。Aさんは他の施設から移ってこられた方で、入所のときのご家族の話では「施設で1人だけ自分のお気に入りの職員をつくり、その職員の声かけはよく聞くが、それ以外の職員の声かけには拒否することが多い」とのことでした。Aさんが入所され2週間程したころ、コミュニケーション能力も介護技術も職員としてまだまだ未熟な私が、Aさんのお気に入りの職員となり、担当になりました。はじめはなぜ私なのか全く分からず戸惑いもありました。しかし、その戸惑いはすぐに解消されました。私が休みや勤務の関係で数日顔を見せる機会がない時でした。久しぶりにAさんに会い、あいさつをすると涙を流しながら、「お兄ちゃん、来てくれたんかぁ、よかった。嫌われたんかと思った」と安堵の表情をされたのです。そしてその日外が暗くなってくると「今日はいつまでおるんで。私のベットで寝られえ」と引き留めようとされ、就寝される前には「もう帰るんか、お兄ちゃんがおってくれてよかった。ありがとう。また来てよ」と手を握りながら涙を流し話され、「頼りにしとるからよう」と言って下さいました。その時Aさんに私の何が良いのか、一度だけ尋ねてみました。するとAさんは、「あんたはな、よう話を聞いてくれて、よう気づいてくれて、ようしてくれる。あんたの笑顔が好きなんじゃ」と話して下さいました。介護職員としては当たり前のことかもしれませんが、私にとっては初めて利用者さんに必要とされているのだと実感した瞬間であり、私の介護に対する考え方の方向性は間違ってはいないんだと自信が持て、私の魅力はそこなんだとAさんから学ぶことができました。

こんな私でも頼りにして下さり、そして笑顔で「ありがとう」と言ってくださることが今の私の仕事のやりがいとなっています。

私の魅力を教えてくれたAさん。

介護という仕事の素晴らしさを教えてくれたAさん。

こちらこそ、いつも笑顔をありがとう。

【佳作】

きっかけ

私が介護の仕事に就いたのは、今から7年前のことです。

介護の道を選んだきっかけとなった出来事があります。それは私が中学生の時のことです。

私の父の実家は岡山市内の中心部にあり、祖父と曾祖母の二人でくらしていました。ある年の元旦、祖父が急死したとの連絡があり、すぐ家族みんなで父の実家に向かいました。向かう車の中で、独り暮らしとなった九十歳を超えて介護が必要な曾祖母を、家に迎えて一緒に暮らしたいと母が言い出しました。私の母は、結婚する前に介護の仕事をしていた為、介護についていろいろと話を聞かせてくれました。話を聞いているだけでも「大変そうな仕事だなあ。」と思ったことを今も覚えています。

祖父の葬儀が終わり、曾祖母が家に来て、母の介護生活が始まりました。お互いに違う人生を何十年と歩んできた二人、時には曾祖母が母の悪口を口にすることもありましたが、母は決して悪い顔をすることなく、自分の時間を曾祖母の介護に費やしていました。

母は「終わりよければすべてよしって言葉があるみたいに、人生の最後で『あぁ、私は私として生まれ、この人生を歩んできてよかった。』と思って人生を全うしてもらえるように、おかあちゃんはおばあちゃんの支えになりたいんよ。」と笑顔で言っていたことを覚えています。母の献身的な介護もあってか、末期癌であった曾祖母は最後まで元気なおばあちゃんでした。

亡くなるまでの何週間かは病院でお世話になっていましたが、看護師の方、身内や家族が面会に行っても、自分の孫である私の父が見舞いに行っても、誰に会っても、「博子か、博子か。」と、母の名前を口にしていたそうです。母は、そのことを嬉しそうに私に話していました。

私が介護の道を選んだきっかけとなったのは、母の介護している姿を間近かで見て「終わりよければすべてよしって言葉があるみたいに、人生の最後で『あぁ、私は私として生まれ、この人生を歩んできてよかった。』と思って人生を全うしてもらえるように、おかあちゃんはおばあちゃんの支えになりたいんよ。」、この言葉に感銘を受け、私も人の支えや力、人の為になる仕事がしたいと芽生えたからです。私も「私は私として生まれ、この人生を歩んできてよかった。」と利用者の皆様に思っていただけるよう、この言葉を胸に抱き、これまでも、そしてこれからも介護という素晴らしいこの仕事に向き合っていきたいです。

【佳作】

ありがとう

「ごめんなあ、忙しいのに丁寧にしてくれてありがとうなあ。」と、にっこり笑う。

「いえいえ、いいんですよ。」と、にっこり笑う。

これは私が働き始めた頃、よくご利用者と交わしていた会話である。よく介護の魅力は何かと尋ねられると、自分がしたことに対して「ありがとう」と喜ばれた時だと聞いていた。しかし、この時の私にはそんなことは全く感じられなかった。このやりとりも仕事だから当たり前、お礼の言葉を頂く程のことではないとの割り切りもあった為か、形式的で無味乾燥なものであったのかもしれない。

この調子で約1年が経過した頃から、あるご利用者からあまり話しかけられなくなったり、介助を拒まれることが多くなったりと、悩みを抱えることとなった。ある時その様な私の様子を見かねた先輩職員より「あんた何でこんなことになったかわかる？あんたはこんなに一生懸命にしとるのにくらいにしか思ってないから、わからんじゃろ。それはあんたがご利用者に対して上からの目線でおって、してやっとるという気持ちじゃけんよ。相手の下に潜り込みなさい。」と厳しく指導を受けた。私はひどく落ち込み、仕事に対して自信を失った。確かにこの1年を省みれば、先輩から指導されたような感情がいつの頃からか自身に内在していたのかもしれない。それが無味乾燥なやりとりとして表れた結果がこれなのだと。しばらく悶々とした気持ちで働いていると、別のご利用者から「いつもありがとうな。わたしはあんたにしてもらうのが一番ええんよ。」と、言われ思わず涙が出そうになった。こんな人間味のない駄目な自分でも、それでも感謝してくれ、必要としてくれる人がいることに、とても感動し、感謝した。それ以来「ありがとう」という言葉が心地よいものに感じられるようになり、いつものやりとりも心からの言葉のやりとりになったように感じる。また関係が壊れかけていたご利用者とも変化があり、少しずつではあるが良い方向へ向かっている。

現在の私があるのはご利用者のみなさんと指導してくださった先輩職員、また介護の仕事のおかげだと思っています。いつもご利用者の皆様からの「ありがとう」という言葉や笑顔で、私の存在価値を教えてくれるような気がします。

「ごめんなあ、忙しいのに丁寧にしてくれてありがとなあ。」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます。」

【佳作】

真っ赤な苺

細く、弱い声で「後から食べるから、置いとって。」と、大きな真っ赤な苺を2個、サイドテーブルに残したまま、食べることなく消化器系を患った母は他界した。

配膳する音がするホールに向かい、これから昼食の介助に入る。

「はい。お待たせしました。」と配膳を終え、全体を見渡し、スタッフの位置を確認して、利用者のTさんとNさんの間に座る。どちらの方も重い認知症で意志疎通は難しい。お二人のできる事、出来ないことを頭に描く。

Tさんは、ほとんど手を動かせないが、口は良く開き飲み込みもスムーズである。Nさんは、コップなどを手に持ち動かすことは可能であるが、口までなかなか届かず、いつまでも食べ物を噛んでいて飲み込むまでに時間が必要である。嗜好に合うお料理は、お二人ともスプーンが口に近づくと自ら口を開けられる。しかし、好きでない食べ物を口に入れると、言葉はないがなんとなく顔の表情で嫌という気持ちが伝わってくる。

食べることは生きることでもあり、食べる事は楽しみだと思う。少しでも食べたり飲んだりして欲しい。食が進まない時は、励ましたり、献立の説明を繰り返してみたりしている。それでも食べられない時は、身体の具合を心配してしまう。ちょっとした体調の変化は、食事の時に良く観察できる大切な時間でもある。

食べ終わり「ご馳走様。お昼ご飯でした。」と耳元で伝えると、Nさんは真顔でじっと見つめてくれる。Tさんが笑った。なんとも言えない優しい笑顔で。嬉しくて、私の心も和らいでいくひととき、その笑顔に「ありがとう。」と答えていた。

私のこの手が、Tさんの両腕になり、食事動作の手となる。コップを握って途中で止まったNさんに、私の手を重ねることで口まで届く。この手のある自分の存在が、誰かの役に立つという嬉しさ、喜びが介護という仕事の魅力だと思う。

今年は、母が亡くなり8年となる。人は人に育てられると教えてくれたお母さん。今は、お母さんと呼べる人達から教わっている。露地植えの苺が店先に並ぶ5月に、食べ残した苺を食べさせてあげるね。少しは食べさし上手と褒めてくれるかしら。

【職員部門】
『就職のきっかけ』

【最優秀賞】

私のきっかけ

私が介護の仕事に就こうと思ったきっかけは、曾祖母の存在でした。

曾祖母とは、私が中学校3年生まで一緒に暮らしていて、目が不自由だったので、お風呂は必ず私と一緒に入り、頭や身体を洗っていました。爪切りや耳掃除も私の役目でした。

中学生と言えば、思春期で家族と一緒にお風呂に入るなんて恥ずかしいはずなんですが、曾祖母とお風呂に入るのは何の抵抗もありませんでした。むしろ、曾祖母には何でも話せて、大好きな時間でした。

介護が必要になった曾祖母は特別養護老人ホームに入所しました。最初はよく面会に行っていましたが、高校生になりだんだん忙しくなってくると、足が遠のいていきました。久々に面会に行った時、進路の話をすると「あんたはよう世話をしてくれるけん、ここで働いて私の世話をしてん。一緒に風呂に入りたい。」と言ってくれました。その時私は、不思議ですが、涙が出たことを今もはっきりと覚えています。

その言葉がきっかけで、介護の職場に就職すると決めました。

曾祖母は、去年眠るように亡くなりました。曾祖母がお世話になった職員の方に「毎日のように、私の孫は老人ホームで頑張っとんで。よう世話をしてくれるんじゃと言われてましたよ。」と教えてくれました。

介護という仕事は大変なことも多いですが、生前の曾祖母の言葉を思い出して、いつまでも自慢の孫でいれるように、日々頑張っていこうと思っています。

【優秀賞】

私の選択

私はデイサービスセンターで勤務を始めてから、もうすぐ2年を迎えます。当初目指していた進路は別にあり、最初から高い志を持って福祉の道を選択したのではないという点で少し恥ずかしく思いますが、結果として大学の福祉系学部に進む事となり、学ぶ中に福祉に対する興味が大きくなって行きました。

福祉分野の中でも高齢者福祉に興味を抱く事となったのは、幼い頃から祖父母と一緒に過ごす事が多く、一番身近に感じられる分野であったからだと今では考えますが、当初、介護に対して私が抱いていたイメージは、汚い、忙しそう等、決して良いものではありませんでした。そういったマイナスイメージを払拭し、私に今の職場を選択させたのは、大学在学中の福祉現場実習での体験であったと思うのです。福祉現場実習では特別養護老人ホーム、グループホーム、デイサービスセンターでお世話になったのですが、最初に私が抱いた感想は、実習先の職員の方々は、当然に忙しそうであるが、何かそれを楽しみながら、活き活きとして働かれているといったものでした。その理由は何だろうと考えながら、実習している中に、私も自らその理由に気付かされる事となったのです。

実習では、職員の方に依頼された事、職員の方の補助業務等、何一つ上手く出来たと感じられる事は無く、反省点ばかりで、少し落ち込み、掃除をしている時でした。あるご利用者の方から「きれいにしてくれてありがとう。また頼むね。」と声を掛けて頂き、本当に嬉しく、気分良く感じました。以後も、別のご利用者の方が積極的に話し掛けてくださり、ご自身の身の上話等を初対面の私にしてくださいました。お話の後に「ありがとう。また聞いてんなぁ。」と仰いましたが、積極的になれずにいた私にとって、この方のお話こそが、私の緊張の糸を緩めてくれたものでした。私は『こちらの方こそ、ありがとうございます。』という気持ちになり、自然と笑顔になりました。実習を通じて、高齢者の方々と係わる中で、人と話す事や「ありがとう。」と言われる事等、今まで普通だと感じていた事が、素晴らしいと感じるようになりました。これこそが、実習先の職員の方々が活き活きと働かれている理由であろうと感じましたし、私が今の職場を選んだ理由です。

実際、当然に実習生とは異なる立場で、職業人として現業にある中で、先に述べたように楽しい事ばかりではありません。それでも、介助の後に「いつも悪いなぁ、ありがとう。」と、仰ってくださる方、お風呂に入られた後に「ええあんばい。」と、にこやかに仰る方、「あんたの顔を見に来たでぇ。」と笑顔でセンターにお見えになる方等、きっとこの仕事に就かなければ、お話する事も一緒に笑う事も無かったと思います。これからも、この仕事、仕事を通じて出会えた皆様との時間を大切にし、働いて行きたいと思っています。

【優秀賞】

早いものでもう八年

お婆ちゃんが他界して早いものでもう八年も経ってしまいました。

私には、共働きであった両親に代わり小さかった私の世話をしてくれたとても優しいお婆ちゃんがいました。

そんな私はいわゆる「おばあちゃん子」というものでした。

小学生の頃、「俺、大人になったらお婆ちゃん孝行で温泉に連れて行ってあげらぁ」などと良く言っていました。

しかし残念ながら私が社会人になりお金を稼ぐより前にお婆ちゃんは弱り、寝たきりになってしまいました。温泉はおろか近所へ散歩にすら行けなくなり食事・フロ・排泄も一人ではできなくなってしまいました。

徐々に家族介護が始まり私も分からないなりにお婆ちゃんの身の回りの世話を始めました。「温泉には連れてってあげれんかったけど、今度は俺がお婆ちゃんの世話をするからよ。お婆ちゃん孝行さしてもらうからよ」そう思いながら介護を始めました。

ところが、自分の想いとは裏腹に素人が満足な介助などできるわけもなく、お婆ちゃんの「痛い痛い」という声が家中に響き渡っていました。お婆ちゃんには安気にしてもらいたいのに、逆に痛めつけているような気がしてとても辛くもありました。

家族も徐々に疲弊していた最中、ほどなくして訪問ヘルパーの方が来てくださるようになりました。すると、あれ程痛がっていた排泄やフロを「痛い」と言うことなく、「ええあんばいじゃった」と答えたその瞬間、「こんな職業があるんじゃなぁ」ととても驚いたと同時に興味を持ちました。

今思えばそれが介護の職場へ就職したきっかけなのだと思います。

お婆ちゃんが他界してもう八年、特養へ就職してもう二年。

他界したお婆ちゃんを今更私が介助する事は叶いませんが、それでも「誰かのお婆ちゃん」を安気にさせてあげられれば良いなと思います。あの時のヘルパーさんみたいに。

【優秀賞】

運命の出会い　～そして、その後～

私は、現在介護福祉施設に勤務する看護師です。看護学校を卒業後は当然の様に病院に就職し、臨床現場で医療看護を中心とした多忙の日々を送った。その日常の中で、多くの患者様を看取った。そして、日を追う毎に、「一人のヒトが亡くなる」と言う事に慣れ、それが「特別な事」では無くなっていった。そんなある日、一人の高齢の女性患者様が、自分の人生で一番嬉しかった事と悲しかった事を話して下さるという出来事があった。その時、初めて一人の患者様の「人生」を感じた。そして、患者様を全人的に捉えるのではなく、病人としての一部分のみを捉えた現状の看護の展開に気づいた。自身が現在まで身を置いていた臨床看護の現状を省みた時、私の看護観の根幹としている「人間対人間の看護」と臨床現場での現実の大きな相違に悩んだ。一人の人間を取り巻く生活環境、人間関係、その人が送ってきた人生を理解し、一人のヒトを全人的に支える事が出来るのは、臨床医療の看護現場ではなく、福祉施設の看護現場が理想的ではないかと考える様になり、福祉施設の門を叩いたのが始まりである。

福祉施設の看護師として働くようになり、病人を看るのではなく、その人の日常生活を看るという看護に変わった。そして、介護・看護スタッフを含め、施設のスタッフが全員で利用者様の「人生を支える」事の素晴らしさや暖かさに触れ、福祉現場で働く事の喜びや、やりがいを知った。

地域に貢献し、苦楽を伴う長い人生を送ってこられた高齢者が、安心して安全に、自分らしく日々の生活を送る事ができる様に、地域全体で支援する事の必要性や重要性を福祉施設で学んだ。当法人の理念である「心で支える老後の安心」を自身が福祉施設スタッフとして担える事に大きな喜びを感じている。

最後になりましたが、皆様にお伝えしたい事があります。私は今、福祉施設で生活されている利用者様が、大好きです。

【佳作】

介護から得るかけがえのないもの

「介護」この言葉に初めて出会ったのは、曾祖母が施設に入所した時、私が中学生の時でした。それまでは介護と言う言葉には無縁の生活をしてきました。しかし、その施設である一人の介護士さんと出会いました。

その介護士さんはいつも笑顔でどんな利用者さんにも平等に接しており、大変な仕事でも、「大丈夫。大丈夫。」と笑顔でこなす方でした。

曾祖母は始めは、「私はこんな所に入れて、みんなが私がいなくなって喜んでいるんだ。」など被害妄想ばかり言って、私たち家族は正直、困っていました。そんな時に毎日、曾祖母の愚痴を聞いてくれたのが、その介護士さんでした。介護士さんと出会って曾祖母の表情や性格が丸くなりました。その時に「介護士ってすごい力を持ってるんだな。私もなってみたい。」と思った事が私が介護士になる第一歩となりました。

その後、介護士になるのを夢に福祉が学べる高校へ入学しました。そこで福祉について具体的に学んでいく中で、「正直、自分には向いていないんじゃないか。実習だって上手い事ばかりいかないし…。」と悩む時もありました。

そんな時期に曾祖母は天国へ行きました。でも顔はとても幸せそうな顔でした。

その時に、私は決めました。「介護士になろう。利用者さんの最期の時まで良かったと思われる生活を送ってもらおう。」と。

そして今私は介護士をやっています。辛いことや苦しい事はもちろんありますが、私はこの仕事が好きです。たくさんの利用者さんの笑顔やありがとうの言葉が私の力の源です。この幸せを感じる事ができるのは介護をしているからこそです。

今日も私は利用者さんを支え、又支えられて一日一日を大切に介護しています。

【佳作】

〝共に〟笑顔でいれる場所

一昨年、私の曽祖母が亡くなりました。曽祖母は、私が介護について考えるきっかけをくれた人でした。曽祖母は足が不自由で、その頃まだ中学生だった私にいつも「ごめんね。」と謝るばかりでした。困った顔ではなく、笑顔になって欲しい。そう思いながらも、どうすれば良いか分からなくて何も出来ない自分がいました。

ある日、テレビで介護の現場を見ました。ご利用者と職員の方が共に笑顔でいる場面が印象的でした。短大生になって、施設での介護実習がありました。実習先に、認知の障がいがある為に、昨日あった出来事を覚えるのが困難なご利用者がおられました。その為か、そのご利用者はいつも一人でおられました。私はそのご利用者に笑顔になってもらいたくて実習中毎日話しかけました。昔の事、趣味の事、いろんな話をしました。実習最終日、私が「こんにちは。名前は覚えとらんけど、あんたの顔は覚えとるよ。」と笑顔で言ってくれました。私もあの時にテレビで見たご利用者と職員の方のように、誰かと共に笑顔になれたのだと嬉しくなりました。この時、私は曽祖母に何も出来なかったのではなく、何もしようとしていなかったのだと気づかされました。

今、私は特別養護老人ホームで働いています。毎日学ぶ事、覚える事が一杯で大変です。その日々の中で得られるご利用者の「ありがとう」というあたたかい言葉、笑顔に何度も助けられています。私はご利用者と〝共に〟笑顔になれるこの場所を大切にしたいと思います。そして、自分がどうして介護に携わりたいと考えたのかを忘れずに、これからも頑張ろうと思います。

【佳作】

15歳の私の選んだ道

　煙草とコーヒーの香りを漂わせ、いつも出かけるときには革靴を履いてお洒落な帽子をかぶっている。それが私の中の優しい祖父の記憶だ。そんな尊敬する祖父も少しずつ歳を取り、自分が何か力になりたいと思ったことから、高校で介護や福祉について学ぶことを決めた。けれども中学生の頃の私にとってはまだどうすれば祖父の手助けが出来るのか漠然としか分らず、介護の現場がどのようなものなのかということは想像し難いものだった。

　そんなとき、塾の先生が老人福祉施設である「恵風会」の見学を勧めてくれた。そこでは介護の仕事について伺ったり、食事の準備をしたり、利用者様とお話をしたりと、様々な経験をさせていただいた。持参したカメラを向けると、利用者様は皆笑顔を向けてくださった。介護というと、初めはあまり明るいという印象を持っていなかったが、日々誰かの役に立てていると実感できるやりがいのある仕事だと感じ、高校では介護福祉士を目指して勉強に励んだ。しかし祖父は私が介護福祉士の資格を取得するのを待たずに、病院の白いベッドの上で静かに息を引き取った。まだ眠っているだけなのではないかと思う程、祖父の最期は本当に穏やかなものだった。

　祖父に出来なかった介護を今は特別養護老人ホームで行っている。しかしここでは教科書に載っていないことが毎日のように起こる。利用者様の症状は皆一緒ではない。それゆえに環境や様々な条件から全ての利用者様にとって本当に良い生活空間になっているわけではないという現実の中で、どうすればより快適に生活をしてもらえるかを考えることは大変ながらもとてもやりがいのある仕事だ。

　岡山の初代の社会福祉士であった祖父に恥ずかしくないような、「福祉」という言葉にふさわしい人間になれるようにがんばっていきたい。そして私は今日もあの恵風会の特別養護老人ホームで介護福祉士として利用者様の笑顔の中で働いている。

【家族部門】
『介護の魅力と感動』

【最優秀賞】
絆ノート

認知症がある母と家族とを結ぶ「絆ノート」を姉が用意してくれました。

施設で預かってもらい、面会の際に家族がそのノートに母へのメッセージを書き、その返事を母が一所懸命にペンを走らせます。

「お見舞いに来て下さり有難うございます。何ひとつご恩返し出来ませんがお許し下さいませ。私の為においで下さり有難うございます。何ひとつお礼は出来ませんが、申し訳ございません」繰り返し繰り返し、感謝と詫びの言葉を書き続ける母。

母にこれ程までの思いをさせている罪悪感で、いつしか私はノートを見ることも書くこともしなくなりました。

私は母が利用している施設の厨房で働いていましたが、仕事中は仕事を理由に邪険な態度をとっていました。そのためか厨房にいる私と、外から面会に来る私とが母には同じ娘には思えなかったのでしょう。面会の度に厨房の娘の悪口を延々と聞かされ続けました。

今は職場を離れ、面会者としてだけ顔を見せるようになったせいか、時々ではありますが、名前を言い当てるようになってきました。

そんなある雪が降る午後のことでした。数メートル先まで見えなくなるほどの雪でしたので、私の身を案じてくれたのでしょうか、「鞄のフタを閉めたら濡れりゃあせんけんな。早うフタをして…フタをして帰りんさい。」

久々に聞く「母」の声は暖かでした。

施設では、暖かい部屋で三度の美味しい食事やおやつを出してもらい、お風呂や手厚い介護に感謝しています。

今日は私も「絆ノート」を書きました。母は相変わらず「申し訳ございません。ありがとうございます。」の言葉を書き綴るけれど、出来れば最後まで自分の手で文字を書き続けられ、一頁でも多く「絆ノート」が綴られていけたらと願っています。

お母さん、私があなたの娘ですよ。

【優秀賞】

取り戻した笑顔

「どろぼう」真夜中に大きな声が最初の頃はその声がとても怖くさえ感じた。今、母は89歳認知症です。母の様子が少しずつ変わっていくことが目に見えて分かった。1年間デイサービスにも大変お世話になったが自宅に帰ってからの反動はものすごいものだった。こんな母を13年間私は娘と2人で当然一生懸命見守った。これが大げさかもしれないが地獄かと改めて思わずにはいられなかった。当時は施設に入所することなど考えてもなく、自宅で見ることが当然と思っていたが、いつしか2人とも目に見えない限界に達していると思えてきた。身も心も次第に具合が悪くなってきた。娘には将来大きな夢も希望もあったが母の世話を私1人にさせることができず、それさえ叶えさせてあげることができなかった。今でもそれは親として申し訳ない気持ちで一杯です。疲れた2人ともとても疲れた相談する人もいない何一つ解決の糸口さえ見当たらず1人の姉さえ理解してもらえず後に施設でお世話になるに至っても「家で見てあげれば認知症は治る」とか言って責められた心痛む言葉が帰ってくるだけで、何一つ助言・協力は全くなかった。入所して5年半になるが、会ってくれたのも1～2度、今の母の頭の中には姉の存在すらないのでは、「おばさん」と呼んだこと、辛い言葉に聞こえたが姉はどう思ったのか、ある人は簡単に言う昔の「話しを歌を」「とてもいいのよ」と、そんなものではない。

母が入所するに至ったのは、当時友人から施設の様子を聞かせて頂き、そこからトントン拍子に入所が決まったのでした。施設の方々、それは心優しい方ばかりで心から安心したが、やはり長い間母との生活がぽっかり穴が開いてしまい後悔の日々が続いた。あの大変な毎日が頭から離れてしまった。会いに行く日は心がウキウキ、帰る車中は裏切りに思えて「許してな、お母ちゃん」と心の中で謝った。名前も出てこないが顔を見ると笑顔一杯の母。今では施設の皆さんに助けて頂いていることを感謝せずにはいられません。今ではこれで良かったのだと思える様になった。一日でも長生きして笑顔で待っていてお母ちゃん。会いにいくからな。

【ショート部門】
『介護の魅力と感動』

【優秀賞】

感謝している方々へ
今の日本を築き上げて下さり
ありがとうございます。
これからは、楽しんで下さいね。
そのお手伝いをさせてね。

歯がゆいな
あなたの心　見抜けない

【佳　作】

利用者の方々と過ごす
大切な時間
少しでも楽しんで、
笑顔になってもらう
それが私の喜び
お互いに「ありがとう」と
言いあえるように

ショートステイのおばあちゃん
来るたび「一年ぶり！」ですが
それだと私56才になっちゃいますよ？
まだ35才なのに…

「早くおじいちゃんに
会いたかったから」
小学生の孫二人が靴下のまま、
面会に来ていた理由

「おいしい。」と
言われ、ほころび
笑顔　咲く

ご利用者から「おいしい。」と言われると、雰囲気、表情などが優しくほころび、お互いに笑顔が生まれます。また、「おいしかった。」と言われていたと、調理員に伝えるとそこでも笑顔が出るので、とても嬉しい言葉だと思います。

「ありがとう」
その一言に　癒される

利用者の
笑顔の数だけ　笑いじわ

頼むから
私が死ぬまで　辞めないで

夜勤明け
心残りが　いっぱいで

（第４回　全国老施協　フォトコンテスト　入賞作品）

岡山県老人福祉施設協議会は、県内の特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホーム（ケアハウス含む）、老人保健施設、デイサービスセンターが会員となり、老人福祉を推進するため、関係機関等の連絡調整を行うとともに、事業に関する調査・研究・協議を行い、かつその実践をはかることを目的として設立された協議会です。

岡山県老人福祉施設協議会 21 世紀委員会とは、岡山県老人福祉施設協議会を構成する会員施設に所属する 50 歳未満の若手経営者、経営管理担当者及び介護チーフ等が中心になり、会員の相互の研鑽及び会員施設職員の資質向上を図るとともに、現場に密着した 21 世紀の福祉サービスを構築し、老人福祉の発展に寄与することを目的として設立された委員会です。

発行／岡山県老人福祉施設協議会　21 世紀委員会

〒 700-0807 岡山県岡山市北区南方 2 丁目 13-1
TEL:086-226-3529
FAX:086-226-3557
http://www.okayama-roushikyo.jp/

このパンフレットで紹介しています「第４回介護作文コンテスト入賞作品」「第４回フォトコンテスト入賞作品」は全国老人福祉施設協議会主催のコンテストによるものです。
※各ページの作文と写真の関連性はありません。